

脳梗塞を患うも、栄養療法で 変わりない日常を取り戻す。

「栄養物語」では、ここまでがん患者さんを中心にとりあげてきました。しかし医療や薬だけに頼らず、食事や栄養の見直しで状態が改善した例はがん患者さんだけに限りません。その中から、今回は「脳梗塞」に陥り、栄養を見直すことで改善したケースを紹介しましょう。



首都圏に住む70代の女性は、今から15年前のゴールデンウィークに突然、体の異変に襲われます。全身がガクガクして立っていられなくなってしまうのです。当時女性は、ママさんバレーの指導者でした。現場で汗を流し、仕事先の会議に出席しようと思った矢先のことです。

を処方してもらって自宅に帰ります。それから数時間後、女性は右手、右足が動かせなくなり、急いで救急車を呼びます。大きな総合病院に搬送されますが、不運にもゴールデンウィーク期間中で正式な検査は一週間後と告げられます。そして検査後に初めて「脳梗塞」と診断されるのです。

もし初期段階で脳梗塞と診断されていたれば、女性の状態は変わっていたかもしれませぬ。MRI検査を行うころには徐々に腕が動かなくなり、結果的に長く後遺症が残ってしまいます。

若い頃からスポーツウーマンで、体力に自信があった女性は「お酒好き」で、おつまみも「濃い味を好んだ」そうです。そのせいか血圧が高く、食生活がリスク要因のひとつになっていたことは否めませぬ。

健康に自信があった女性ですが、病気になることで精神的に落ち込み、丸3年間は自宅に引きこもりがちな生活を送ります。しかし4年が経過した頃から「このままではいけない」と奮い立ち、家族から紹介されたりハビリ専門医の指導で回復

を目指します。2018年の春には、ジムに通っていた友人から、ポタニック・ラボラトリーを紹介され、森山先生の正常分子栄養学と出会います。

降圧剤など4種類の薬の服用とリハビリ中心の治療を受けていた女性は、ポタラボの栄養講座に参加したその日から、身体機能の回復を目指し、栄養療法を実践することを決めます。

同時に、病院の処方薬を全て辞め、ポタラボ製品での栄養補給と徹底した食事管理を始めました。

そして「病気前の日常」を取り戻すまでになっていくのです。どんな栄養療法をしたのか、詳細は次号に続きます。

症が残ったり、生命に関わることもあります。症状にもよりますが、一般的には発症から「3時間以内」に血栓溶解剤を使って血栓を溶かし、血流が戻ることで症状の改善を図る治療が行われます。



あきやましんいちろう
秋山 真一郎

医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授。NPO法人がんコントロール協会理事。がん免疫治療と植物栄養素を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。